



識聞録

ゴルフビジネスのプロが30年以上回って見て聞いて感じた世界のゴルフ文化をお伝えする連載。第5回は筆者が見たオーガスタのお話です。

アメリカ大統領も苦しめた17番の木。

ゴルフの祭典「マスターズ」がまもなく開幕しますが、そのティーオフを待ちきれない方々も多いことでしょう。オーガスタも、毎回のように完ペキな状態に仕上がっていますが、今年2月にアメリカ南東部を襲った寒波の影響で17番ホールのアイゼンハワーの木「アイクスツリー」が着氷の重さで枝を失う被害を受けました。残念なことにも再生も不可能との判断で、伐採されることになり、17番は1つの象徴を失う事になりました。

オーガスタ・ナショナルのペイン会長もプレスリリースを出すほどの騒動でしたが、オーガスタでは一般家庭でも3日間以上停電になるぐらい影響が大きかったのです。コースのダメージがそれだけで済んだことは幸いと言えるのかもしれませんが。

このアイゼンハワーの木を巡っては、当時のアイゼンハワー大統領がいつもティショットの邪魔になってしまおうとして1956年のオーガスタ・ナショナルの理事会で切り倒す審議を起した記録が残っています。しかしクリフォード・ロバーツ会長は「即」反対し、審議を中断。決議もせずに会議を閉会したと言うエピソードも語り継がれています。56年と言えば、アイゼンハワー大統領の任期中(53年〜61年)でしたので現役アメリカ大統領さえ黙らせてしまおうオーガスタの会長の権力がよく

わかる話ですね。「アイクスツリー」の由来は、それから始まったと言われます。

オーガスタの敷地内にはアイゼンハワー大統領の名前を持つ施設があります。アイゼンハワー・キャビンと呼ばれる建物ですが、当時現役の大統領が訪れるためにシックレットサービスの部屋や、地下には専用回線が設置されており、オーガスタの敷地内の「ホワイトハウス」の役割をしていた建物です。現在の大統領は休みにはキャンプファイブッドなどを使いますが、同じようなイメージでアイゼンハワー大統領はオーガスタ・ナショナルを使っていたようです。

裏方までも中途半端をしない徹底した方針。

マスターズ期間中は別の場所で保管されていますが、通常のメンバーオンリーの時期には、クラブハウス2階のゴルフコースの見える窓際に大統領が実際に使っていた執務机と椅子、そして歴史的な会話がされたであろう電話機などが展示されおり、メンバーやそのゲストが座っているのを見かけます。

さて、今回のような異常気象はトーナメント期間中に起こらず事なきを得ましたが、近年は雷雨や突風の被害も頻繁に起こっています。2年前には夜中に雷雨を伴う突風があり、16番の裏にあるトイレの施設に木が倒れるトラブルもありました。しかし、翌朝には移動式のサー

Vol.5

オーガスタの危機管理

アイゼンハワー大統領の要求も突っぱねたオーガスタの権威。



Dwight D. Eisenhower

Clifford Roberts

ビスが運び込まれ、翌日には屋根も完ペキに整備されて通常の状態で使えるようになっていました。万が一の場合に備えた保守体制が世界最高のトーナメントを支えているのですね。オーガスタでよく知っているグリーンキーパーやスタッフとは年間を通じて話す機会がありますが、全員が「Best or Nothing」とよく口にします。要するに「中途半端な事はやらない」ということです。クラブハウスの中からコース内の売店のスタッフにまでこの精神は徹底しているので、マスターズに来る全員がベストな状態を楽しめるわけです。

常に完ペキを追い求めるスタッフ、危機管理体制までしっかりした経営方針があつた美しいグリーンや雰囲気を作り出しています。日本のトーナメント主催者も運営会社に丸投げするのではなく、マスターズのように関係者全員でベストを目指すという姿勢を持てば、それぞれの思い入れが反映されて、各トーナメントに色が生まれ、より魅力のある舞台を作ることができているのではないのでしょうか。

ゴルフビジネスのプロフェッショナル

神野方仁(じんの・みちひと) 1956年生まれ。テレ・プランニング・インターナショナル株式会社代表取締役社長。国内外の様々なスポーツビジネスに関わり、中でもゴルフはマスターズのようなメジャー大会からジュニアゴルフに至るまで、イベント、放送、広告、マーケティングなどの面に長年携わっている。日記を公開中 Fast Track Michi's Diary: www.tpi-j.co.jp/diary/index.html



イラスト/ソリマチアキラ